



PREX NOW

No. **110**
December
2001

財団法人 太平洋人材交流センター
Pacific Resource Exchange Center

contents

page 1~2 セミナー
大阪、フィリピンのセブ、ダバオを結んで
遠隔研修を実施

page 3~4 セミナー
遼寧省・瀋陽市で
「中小企業診断セミナー」を実施

page 5 特集【各国研修員からのメッセージ】
フィリピン ローレイ R.ドゥライさん

page 6 PREXだより
ホストファミリーからのお便り
事務局ニュース
12月実施の研修



セミナー

SEMINAR

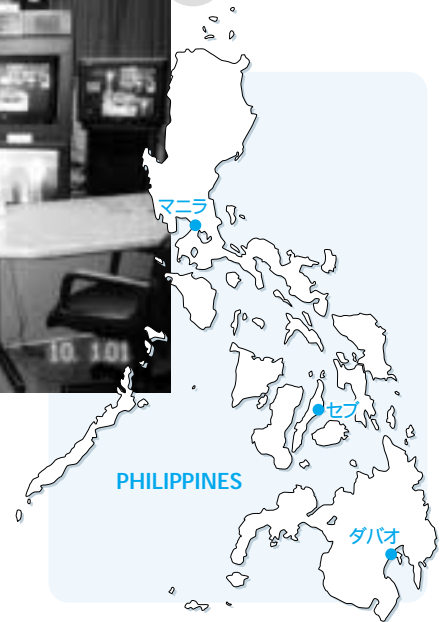
大阪、フィリピンのセブ、ダバオを結んで 遠隔研修を実施



テレビ会議室の様子



モニターに映し出された各会場の様子



PREXは、財団法人「海外技術者研修協会(AOTS)」及び社団法人「関西経済連合会」が主催する「AOTS・関経連アセアン海外研修」を受託。10月1日から4日までの4日間、フィリピンのセブ市・ダバオ市及び大阪の3地点をテレビ会議システムで接続し遠隔研修を実施した。

今回の遠隔研修は、フィリピン総領事館よりの要請を受け実施。国際市場に通用する商品の開発に関する日本の事例を紹介しフィリピン産品の国際競争力の向上をはかり輸出を促進することにより、フィリピン経済のより安定的な成長に寄与することを目的として、「国際競争力向上のための経営改善」をテーマに実施した。受講者はフィリピンの輸出関係企業幹部や輸出促進に関連する経済団体・政府関係者等で、セブ会場48名・ダバオ会場69名の参加を得た。

国際競争力向上のための経営改善をテーマに

研修第一日は、セブ会場にロハス貿易産業省長官(代読)川上AOTSフィリピン所長、大阪会場にピリヤマール在大阪神戸フィリピン総領事、青柳関経連理事・国際部長を迎え開講式を行った後、小田野滋賀大学教授の基調講演を初めとして日本市場の特性に関する講義を中心とした研修を実施した。研修第二日は、製品開発に関する講義の後、本研修の目玉である商品評価会を翌研修第三日終日にわたり実施した。

本商品評価会はフィリピン側企業が事前に実際の商品を日本に送付しておき、研修時にフィリピン側企業と日本側の評価者とがお互いに実物を目の前にしてプレゼン・評価を行うもので非常に人気のあるセッションであり、フィリピン企業の参加要望が強く当初予定した一日間の日程を延長し実施したものである。評価会ではセブ側10社・ダバオ側14社が食品・家具・アクセサリ・ギフト・木材各分野の商品についてプレゼンを行い、日本側はそれぞれの分野を専門とする企業の代表者が評価者となって品質・価格・デザイン・納期等について日本市場の現状を踏まえた厳しい評価を行い相互に活発な討議

が行われた。研修第四日は日本側2名、セブ・ダバオ側各1名のパネリストによる討論が行われ4日間にわたる研修のまとめを行って今回の遠隔研修を終了した。

日本市場参入を目指す研修参加者たち

遠隔研修終了後の話であるが、フィリピン側企業から「スペイン風の味付けをしたイワシのピン詰を売り込みたい」「ファッションアクセサリーを扱う企業や日本市場の動向を教えてください」等、商品の取引に関する問合せが8件寄せられており、評価をお願いした方々を通じて具体的なコンタクト先等の紹介をいただいている。この問合せが商談として成立すれば幸いであるが、評価者も指摘していた様に日本市場への参入は生易しいものではないと思われる。しかしながら、実際に日本企業との対応ルートを通じて日本市場における商品動向、ひいては自社商品の市場参入の可能性を知り、また参入のための商品開発のヒントが得られるならば、本遠隔研修を実施した意義があったものと密かに期待するところである。

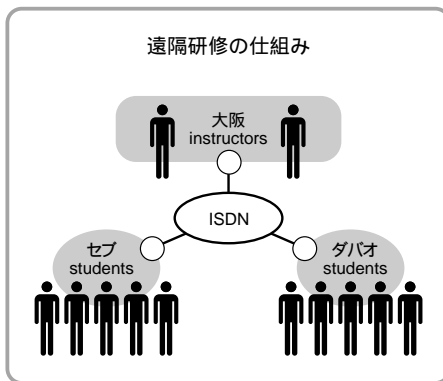
国際交流1部 部長代理 瀬尾 寿樹



上)ビジネスマッチング：大阪会場
中)セブ会場の様子
下)ダバオ会場から質問する参加者



商品評価会に出展された産品



TOPICS

テロ事件の影響

今回の遠隔研修実施にあたって9月11日にアメリカで発生したテロ事件の影響がPREX職員の現地派遣中止という予期しない面で現れた。最終打合せとして現地を訪問し現地カウンターパートと研修運営・機器接続等の確認のためのリハーサルを実施し、問題点の洗出し及び対処策の確認を行っていたため、本番時には大きなトラブルも無く無事研修を終了することができた。はからずも遠隔研修の将来像として想定し

<プログラム>

10月1日

基調講演

「国際競争力強化 - 生産性向上と人材育成」

小田野純丸 滋賀大学教授

「日本市場の特徴 - 消費者の動向」

ロイ・ラーク 流通科学大学教授

10月2日

「商品開発」

桃田雅好 株式会社マダム・取締役執行委員

商品開発担当・E/Oスキンスイエンス

事業部長

「日本の輸入商品の事例紹介」

河村一雄 大阪ビジネスパートナー都市交流協議会・

アドバイザー

「日本・フィリピン間での商品評価会」

10月3日

「日本・フィリピン間での商品評価会」

10月4日

「パネルディスカッション - 国際競争力強化の課題」

「グループ発表会 (フィリピンローカルプログラム)」

商品評価会・パネルディスカッション講師陣

河村一雄...大阪ビジネスパートナー都市交流協議会

アドバイザー

坂本洋治...株式会社マックス

取締役営業部長 IT戦略室部長

西 隆治...ヒューテック株式会社

代表取締役

岡増俊範...株式会社カナンインターナショナル

代表取締役

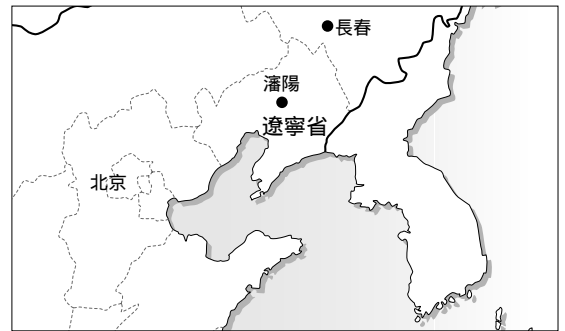
太田一朗...日本コレス株式会社

代表取締役

ている職員の現地派遣を伴わない遠隔研修実施の初のケースとなった。今後遠隔研修実施にあたって全てこの形態で実施できると考えることは危険であるが、少なくとも 取組意欲・体制を有する現地カウンターパートとの連携・信頼性構築、技術的に信頼できる設備・機材業者の選定、の2ポイントを押さえることにより実現の可能性はより大きくなると思われる。この点で、急な予定変更にもかかわらず早く対応していただいた現地カウンターパートであるフィリピン貿易研修センター、及び貿易産業省セブ・ダバオ事務所の皆様に心からの謝意を表するものである。

遼寧省・瀋陽市で 「中小企業診断セミナー」を実施

PREXは、2001年10月15日～25日まで、国際協力事業団(JICA)の「短期専門家派遣制度」を利用し、中国国家科学技術部の要請により、中国遼寧省瀋陽市で「中小企業診断セミナー」を実施した。参加者は中国東北地方の科学技術委員会傘下の生産力促進センターや企業の方を中心とした70人であった。瀋陽市は遼寧省の、日本でいう県庁所在地。国有企業の多い古い工業都市である。JICAが瀋陽市を中小企業近代化モデル都市としてさまざまな調査や企業診断を行っている関係で、JICAの希望により瀋陽市においてセミナーを実施することになった。



セミナー概況

次の先生方に専門家としてご協力いただきました。

米永 繁夫先生
中小企業診断士、
(有)CBC 代表取締役
...経営戦略診断、人的資源管理診断、
マーケティング診断、企業診断実習)

三戸 俊英先生
公認会計士、
公認会計士三戸俊英事務所
...財務分析

杉村 光二先生
中小企業診断士・技術士、
ソーケンマネジメント(株) 常務取締役
...生産管理、IT活用事例紹介、
企業診断の手順、企業診断実習

PREX津曲事務局次長も専門家として参加し、企業診断概論を担当した。

参加者は、昨年の参加者に比べるとおとなしく、理解度にばらつきがあるような印象を受けた。それでも熱心にメモを取り、まじめに取組んでいた。また、研修コースの中で、以前JICAの調査団による企業診断と指導を受け、経営を改善した企業訪問もアレンジし、診断を受けた後の企業と受ける前の企業の2つをみる事ができた。

企業診断実習

今回の診断企業は、国有企業から私営会社になったばかりの、ベークライトの歯車メーカーであった。歯車の市場は衰退しており、目下家具の生産で経営を維持している。将来的には、7年間かけて開発し、特許も取得した新型ポンプを主力商品にしたいという歯車 家具 ポンプという冒険的取組みに、驚き!。これまでの企業診断実習は、主に先生方の診断を参加者が見学するという形式であったが、今回は事前に先生より診断の手順を学び、参加者が主体的に企業を診断し、診断報告を作成・発表するという形をとった。診断報告書の作成はグループ毎に夜遅くまでおこなわれ、みなさん熱心に取組んでいた。診断企業の社長もセミナー参加者として加わっていたが、参加者・講師からの厳しい診断内容も真摯に受け止め、大変勉強になったと感謝する大人物だった。

セミナーを終えて

今回のセミナーは、企業診断の際にデジカメで撮影した現場をプロジェクターでスクリーンに映しながら先生に講評をいただくなど、今までにない取組を多く入れた実践的な講座になったと思う。ご多忙の中ご協力いただいた先生方には心より御礼申し上げます。瀋陽での講座を終了し、北京で国家科学技術部にセミナーの報告をしたが、大変感謝された。責任者の「20年前、中国にこんな日がくるとは想像もできなかった。10年後の中国はどうなっているのか、今は想像もできない。ただ、今よりずっとよくなる中国になっていると信じている。みなさんも信じてほしい」という言葉が印象的であった。我々のセミナーが、微力ながら「よりよい中国」のために役立つことを心より願っている。

国際交流2部 主任 酒井 明子

(次頁、専門家の声に続く)

【今回の珍味】 今回の珍味は、瀋陽で出された姿のままの蛙の煮物と、孔雀のたまご。蛙はどうしても食べる気になれなかったが、孔雀のたまごはおいしかった。孔雀のたまごはみるのも初めてだった。北京で会った中国の人たちに話すと、孔雀のたまごなんて食べたことない、人間って残酷だなあ、といわれ、大変複雑な気持ちになった。



グループ討議の結果を発表する研修参加者



企業診断の様子



瀋陽市怪坡にて

【 専門家の声 】

瀋陽の毛沢東像

中小企業診断士
米永 繁夫 専門家



瀋陽より北の長春やハルビンには行ったことがあるが、瀋陽は今回が初めてで、期間中14日間滞在した。かつて計画経済時代、瀋陽は大型国営企業を中心とする重工業地帯として栄え、中国経済を牽引した。現在は、市場経済化への環境変化の中で、変化に対応できず苦しみながら脱皮しようとしているように見える。日中両国政府合意に基づく、JICA 中小企業振興のモデル都市(瀋陽と杭州)に選ばれ、昨年1年間、日中関係者の真摯な協力が積み重ねられた。それに呼応する形で今回の研修会が瀋陽で開催された。

セミナーでは、経営戦略、人的資源管理、マーケティング戦略を主に担当したが、受講生の態度には温度差が見られた。やる気があって積極的に吸収しようとする人とそうでない人との2極分化など。

街の中心にある中山広場には、なつかしい毛沢東の巨像が健在で、夜には大勢の人たちがその周囲でそれぞれにグループを作ってダンスや遊戯に講じていた。その表情や動作が実に楽しそうであったのが印象的であった。

瀋陽で企業の
財務分析方法を紹介

公認会計士
三戸 俊英 専門家



1999年の北京で行われた中国専門家派遣事業に引き続き、今回も専門家として参加した。1999年には12日間全日程参加したが、今回は財務分析の講座の2日間を担当した。また、前回の講座とはちがいで、今回は直接中国語で講義し、企業の財務分析をするために必要な分析方法を紹介した。日本の事例では、会計制度がちがうため、わかりにくいので、中国の方々になじみのある中国の上場企業(例えば海尔、长虹など)の財務諸表を例とした。ただ、公開されている財務諸表には、詳細なデータが含まれていないこともあり、中小企業を分析するときに重要となる生産性分析などできないという限界もあった。事例は大企業のもの

であったが、財務分析の方法は企業規模の大小にかかわらず同じであるので、研修員は学んだことを自身の診断業務に活用できると考える。

参加者の印象としては、財務分析の知識・経験のある参加者と、そうでない参加者がはっきりわかれていたように思う。財務分析の知識・経験のある参加者は、反応が他の参加者と全く違った。また、瀋陽市には7年前にきたことがあるが、そのころに比べるとずいぶん発展したという印象をもった。今回の講座が、参加者が企業診断を行う際の参考となることを期待する。

中国は不思議な国だ

中小企業診断士・技術士
杉村 光二 専門家



それほど何回も経験したわけではないが、中国を訪問するたびに感じることで、「中国は不思議な国だ」。

街には最高級車が走っているかと思えばガタガタボロボロの車もある(これは東南アジア各地で見ることだが)、オート三輪、オートバイ、自転車、農耕機や馬に引かれた荷車、拳銃は人が引くりヤカーまでが片側3車線の街路を走る。ロケット・ミサイルを飛ばす国でどうして馬車なのか。貧富の差といえばそうかもしれない、12億あるいは14億といわれる人口、広大な国土では当然なのかもしれない。関西弁で言うと「いろいろおまんがな」である。

今回の研修生の中に企業の社長(董事長)がいて、2週間の長丁場を全出席。企業診断を自ら学ぶのであるから大いに結構なことではあるが、なん

と研修生一同が訪問して診断実務を体験する企業の社長でもある。それもこの企業の主力製品が陳腐化してしまい、数多くの生産機械のある現場はここ数ヶ月生産停止状態、社員は一時帰休中、社運を賭けようとしている新製品はこれからという状態。日本の感覚なら、社長は青い顔して金策に走り回っていて当然だが、我々の訪問のためにわざわざ会議室棟を新築し、内部設備も急拵えしたという余裕(?)。研修生からは素朴な疑問、辛らつな意見が飛び交う。普通なら現状を弁明又は将来性について蕩々と述べると思いきや、「診断を受けているのですから」と謙虚な(?)一言。大らかというか、私にとって中国は不思議な国だ。



フィリピン ローリィ R.ドゥライさん

ファーストデフェンス社代表

1998年関経連アセアン経営研修・
1999年アセアン海外経営研修に参加

フィリピンの人材育成について

人材育成には目的に応じたその国独自の歴史があると思います。現在、フィリピンの人口は7,300万人前後ですが、半分が労働年齢、4分の1が学齢期の子供、残りが幼児と退職年齢に属しています。国家の生産性を支える労働力として考えられる労働年齢人口が多いことは、フィリピンがアジアにおける投資受入国となっている最大の要因でしょう。

フィリピン政府は、こうした点からも人的資源の開発を国の優先事項と考え、独自のプログラムを準備しています。なかでも製造業部門のマンパワーの供給源となっているのは労働雇用局で、新卒者や高等教育、大学教育を受けられなかった者を対象に職業訓練や技術系の訓練を行っています。費用は政府が支給していますが、貧困撲滅を目標に掲げる慈善事業団体や個人の寄付に頼ることもあります。

またフィリピン高等教育委員会 (CHED) では、独自の大学院制度があり、法律から医学、化学、エンジニアリング、ビジネス学習までの産業ニーズを満たすコースや、労働者の必要に応じたコースを提供しています。これも政府の補助金を得て運営されていますが、教育訓練を生かして成功した個人や民間部門が資金を援助する場合があります。またさらに専門的な能力を高めるための専門課程もあり、フィリピンは国際水準に比べてもある程度の人材育成機関を備えていると思います。

人材育成と文化

また人材育成には文化が重要な役割を果たすと思います。フィリピンには、フィリピン士官学校があり、ここでは、フィリピン軍 (AFP) に就役する愛国的国民を育て、訓練を受けた者は外的攻撃からフィリピンの独立を守ります。この学校を運営する予算は国庫から支出されていますが、フィリピン軍の他の軍管区もこれを分担しています。

人材育成は政府のみの業務ではなく、非政府組織 (NGO) 元、失業者や高齢者が生産的労働力になるために参加できる生計プログラム的一端を担っています。この組織は、資金を援助に依存しており、国内ならびに海外の慈善団体から財政援助を受けています。訓練は、ボランティアによって実施されることが多いです。

総じて、訓練のチャンスを与えられた人は、食料、衣類、住宅などの基本的な生活をするのに必要な程度の所得を得ることができると思います。教育があれば、貧しかったり社会から取り残されたりすることはなく、教育こそが貧困と戦う決定的な武器になるというのが私の考えです。しかし、人材育成は、フィリピンにおいて現在進行中の活動であり、個人に教育を植え付けることはその人の文化や生活の様相によるところが大きいと思います。

【 ホストファミリーからのお便り 】

ベトナム青年ホーさんのホストファミリー宮原さんにお便りをいただきました。

（「ベトナム青年招へい事業」7月実施）

兵庫県川西市 宮原 正典さん

今回ホストファミリーを引き受けた目的は2つある。

1つは7年前に企業視察旅行でホーチミンに行った経験があり、その後ベトナムの変化に興味があったこと。もう一つは、2人の子供に良き経験を積んでもらいたいと思うことにあった。

私たちがお引き受けしたホーさんは、英語が話せるという事だったので、家内や子供は、英会話の本を買い込み、事前準備に取りかかった。ちょうど子供たちも夏休みが始まったばかりで、「どこに連れていこうか、何を食べてもらおうか」と久しぶりに家族と真剣に話し合い、何かのプロジェクト作業をするように計画を立てていった。

初日は田舎にある「そば打ちの体験」、そして2日目はホーさんの希望を聞いて奈良、京都を回った。京都では、舞妓の衣装を着せてくれるところがあったので、ホーさんに「日本に来た外国人は必ずこの服を着るのだ」と説得し、変身にチャレンジしてもらった。その格好で嵐山を見学したのだが、本物以上に、また日本人以上に格好も素振りも、日本人らしかった。他の観光客から写真を撮られ、彼女もモデルになった様な気分で、喜んで写真撮影を引き受け、家族共々楽しんだ一日であった。

また、彼女が衣料関係の仕事をしており、何度か連れてい

ったスーパーでは、熱心に衣料品売場をまわり、ここでも私のベトナム人感である「素直・真面目・勤勉・よく働く」を見ることが出来た。

3日間ではあったが、最後の日は、彼女も私の家族も、家族と別れるような寂しい気持ちを持ち、彼女の「このままずっとここにいたい」と言う言葉に、不手際もあったが、お引き受けして良かったと思い、いつか家族でホーさんを訪ねていくと約束した。

今回の経験で、子供たちは語学力の必要性を感じてくれたと思う。語学をマスターすることにより、視野がさらに広がる経験を積むことが出来るのではと。そして、また、逆にもっと大切なことである「語学が出来なくても、身振り手振りでも、何かを伝えようとすれば、気持ちは通じるのではないか」と言う2つのことを学べたように思う。

貴重な体験の機会を頂いたPREXの方々に感謝しています。



京都で舞妓の衣装をつけたホーさんと宮原さんご家族

事務局
ニュース

PREX 第14回常任幹事会を開催

11月5日11:00～13:00、PREX会議室においてPREX常任幹事会を開催した。冒頭、座長津田和明サントリー株式会社副社長(関西経済同友会代表幹事)からの挨拶、事務局による事業報告に続き、常任幹事の皆様から今後のPREXの事業に対する貴重なご意見とご助言を頂いた。なお、幹事会は関西の産官学界の48名(うち常任幹事、15名)で組織されPREXの活動にご支援を頂いている。

出席頂いた常任幹事と代理の方は以下のとおり。

津田 和明	サントリー株式会社 副社長(関西経済同友会 代表幹事)
萩尾 千里	社団法人関西経済同友会 常任幹事・事務局長
松下 正幸	松下電器産業株式会社 副会長 (関西経済同友会 常任幹事・国際問題委員会委員長)
宗田 奎二	株式会社竹中工務店 取締役
山田 廣則	大阪ガス株式会社 専務取締役
小巻 善郎	株式会社大和銀行 審議役(山本 功 常務取締役の代理)
武田 壽夫	関西電力株式会社 支配人(青木 勲 常務取締役の代理)

なお、PREX三田専務理事が常任委員を務める関西経済同友会の国際問題委員会は11月に「ODAの提言」をまとめた。そのなかでODAを効果的に活用するためには、NGOの専門性や地方自治体の活力が必要とし、実例として民間の人材育成実施団体であるPREXを挙げている。また、ODAの見直し、削減は必要であるが、途上国の人材育成支援はもっと強化すべきであると主張した。

12月実施の研修

兵庫県 ハバロフスク地方 マーケティング・セミナー

日時 2/3～14

参加者 ハバロフスク地方のマーケティングに携わる企業幹部、担当行政官 8名

内容 兵庫県の友好提携先であるハバロフスク地方よりわが国の中小企業における最新のマーケティング手法について考察する。

編集・発行

財団法人 太平洋人材交流センター
専務理事 三田 昌孝

大阪市北区中之島6-2-27 中之島センタービル24階
〒530-6691 (中之島センタービル内郵便局私書箱60号)

TEL 06-6441-2650
FAX 06-6441-2640

ホームページ: <http://www.prex-hrd.or.jp>
電子メールアドレス: prex@prex-hrd.or.jp